

【助成施設訪問】 森田さくらこども園

福井県福井市にある〈森田さくらこども園〉には総額約100万円を助成。同園は助成金で乳幼児用のお昼寝マットのほか、バランス感覚を育むブロックマットや鉄棒、玉入れ台、メッシュトンネルなどの運動器具を購入した。

森田地区は、福井市を流れる九頭竜川の沿岸にある繊維業の盛んな街だった。時代の経過とともに衰退していたが、1996年から始まった福井市の再開発によって新しい街に生まれ変わった。JR西日本北陸本線森田駅の徒歩圏内にあり、中心街の福井駅へは車で10分ほどの距離。今では人口約1万6000人、共働きの子育て世帯が多く暮らしている。

その森田地区にある〈森田さくらこども園〉は、社会福祉法人さくら会が設置する二つのこども園のうち、2番目に設置された幼保連携型の認定こども園で、2022年4月に開園した。今では0歳から5歳の子ども155人を預かっている。

「森田地区は、街が整備されて暮らしやすいですし、福井市の中心街へ通勤するにもとても便利です。福井市内にある小学校のなかには、1学年に1クラスしかないところもあります。森田地区の小学校は1学年に6クラスあるくらい子どもが多くなります。乳幼児の子どもも同じくらい多くいて、入園希望者もたくさんきます。少子化の原因の一つとして〈預けるところがない〉ということがよく言われますが、森田さくらこども園ができたことで、共働きの夫婦でも、2人、3人と子どもを育てられる環境が整いつつあると思います」と同園園長の伊藤仁美さん。



お話を伺った同園園長の伊藤仁美さん。

同園では、保護者への子育て支援の一つとして、子ども用のおむつとお尻ふきを定額で提供するサブスクリプションサービスを導入している。月額1500円で、おむつとお尻ふきを使い放題のため、保護者の負担軽減となっている。

「おむつ一つ一つに名前を書いて持つてなくていいし、使用済みのおむつを持ち帰る必要もありません。そうでないと、保護者は、毎日準備にすごい手間がかかります。共働き世帯が増えていきますから、時代に合わせた保育をしていかないといけない。私は働く保護者の味方でいたいと常に思っています」

そうした保育環境を整えている同園だが、新型コロナウイルスによる木材価格の高騰の影響や、補助金の減額などが重なり、さまざまな設備の整備に追われるなかで、十分な運動器具を揃えられない事情があった。

しかし、今ではバランス感覚を養うブロックマットや鉄棒、玉入れ台、メッシュトンネルなどの運動器具が充実している。それらが今回の助成対象だ。

「私たちの園では、子どもたちが主体性を持って行動することを大切にしています。そのためには、主体性を育む環境づくりが必要です。助成していただいた運動器具が、子どもたちが自ら考えて行動するきっかけの一つになっています」

園を訪れた日は、子どもたちがブロックマットや鉄棒を使って運動していた。鉄棒をしていた子どもたちが、〈鉄棒にぶらさがってるのが好きなのー〉〈ぼくは逆上がりができるよ！〉と見せてくれた。

また、同園では給食や昼寝でも、子どもたちの主体性を大切にしている。同園では遊ぶ場

所、食べる場所、寝る場所が分けられていて、他の子どもを気にせずに、食べる量や時間、寝る時間を自分で決めることができる。

「給食をみんなで一斉には食べません。ビュッフェ形式で自分で食べるものは自分で取ります。お昼寝の時間も決まった範囲はありますが、眠くなったときに寝られるようにしています。助成していただいたお昼寝マットは、とても軽くて子どもでも持ち運びができて、とても助かっています」さらに、同園では地域の子育て支援として、〈森田さくら児童クラブ〉を運営している。児童クラブは、園舎2階にあって、地域の小学校に通う児童を預かっている。兄弟姉妹を同じ場所に預けられるため、保護者からも喜ばれているという。

「当初、児童クラブをつくる予定はなかったのですが、小学生の子どもを預かってほしいという要望が地域の保護者から多くあり、開設することになりました。夏休みなどの長期休暇のときは、毎日お弁当をつくるのが大変ですから、園でつくった給食を児童クラブの子どもたちにも提供しています」

最後に伊藤園長は、「子どもたちには、〈先生に言われたことだけでなく、自分で考える力が大切なんだよ〉と話しています。これからも、子どもたちが主体的に遊び、こころも体も健康になるための保育活動を行っていきたいと思います」と語る。（文 佐藤修久／地人館）



鉄棒で運動する子どもたち

ブロックマットで運動する子どもたち 子どもたちはブロックからブロックへ飛びうつる。ブロックに傾斜がついていて、遊びながらバランス感覚を養うことができる。